

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

加藤真生

【所属】(助成決定時)

名古屋大学大学院人文学研究科日本史学専門博士課程後期課程

【研究題目】

帝国日本の形成と日清・日露戦争・感染症・軍陣衛生・学術ネットワーク

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、日露戦争までの日本陸軍軍医部の感染症対策の展開について分析する。20世紀初頭までの世界の戦争は基本的に戦死者の大半が病死者であった。明治期の日本においても初の本格的な対外戦争である日清戦争では戦死者の約九割がコレラや赤痢などの急性感染症による病死者であった。しかし、日清戦争から10年後に生じた日露戦争では急性感染症による病死者が抑制された。このことをもって日露戦争は、戦傷死者が病死者を上回った初の戦争として評価されている。では、なぜ日本陸軍は日露戦争において感染症を抑制することができたのか。明治期の日本陸軍軍医部はいかなる学術環境下であり、どのような学術研究を進め、いかにして環境適応を果たしたのか。以上の問いを明らかにすることで、軍事史、医療史、疾病史の複合的な観点から帝国日本の形成過程における日清・日露戦争の意義を検討する。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、主に明治期における日本陸軍軍医部と欧米各国陸軍軍医部との関係性の展開に注目する。具体的には、第一に日本陸軍軍医部と欧米各国陸軍軍医部との直接的な関係性、第二に万国医事会議と万国衛生及びデモグラフィー会議といった医学・衛生学の国際学術会議における軍事医学部会という場を通じた日本陸軍軍医と欧米各国陸軍軍医の関係性を検討する。

19世紀半ば以降、欧米では医学・衛生学に関する国際会議が開催され、国際的に医学・衛生学に関する学知の共有・議論が進められるようになった。それは軍事医学・衛生学も同様であった。この国際会議では軍事活動と医療・衛生に関する様々なトピックが議論されていたが、急性感染症の予防や治療法も重大なトピックの一つであった。日本陸軍軍医部は、この国際会議の軍事医学部会に日清戦争以後本格的に参加するようになり、関係性を深めていった。日露戦争における感染症抑制を考えるうえで、日清戦争以後展開する学術的な国際進出という点は、日露戦争における感染症抑制を検討するうえで注目すべき重要な要素の一つだと考えられる。

また、日本陸軍軍医部が国際進出を進めるにつれ、欧米各国陸軍軍医部との間で医療・衛生に関するモノ・情報の交換も盛んになった。交換し合うモノ・情報の種類は多岐に及ぶが、軍医が作成した報告書や軍事医療統計などの公的な書類のほか、学術書、従軍記録などが確認される。上記の国際会議で共有される情報が純粋な学知である一方、軍医部間で共有される情報は公的文書など異なる性質のものである。

以上からは、明治期における日本陸軍軍医部は軍事医学・衛生学およびその関連情報を獲得することができる重層的な回路を有していたことが想定される。そこで、本研究では上記の実態を明らかにすべく、①国際会議の議事録、②日本国内の軍事医療関係史料(軍医の個人史料、日本陸軍軍医部関係史料など)を中心に分析を進めた。

【結論・考察】(400字程度)

明治期における日本陸軍軍医部が有していた欧米各国陸軍軍医部との学術的な回路は、①国際会議、②欧

米各国陸軍軍医部との直接的な回路、③北清事変以降の清国の3種類が存在した。①では、単に国際会議に出席し、各国軍医と親睦を深めるだけでなく、国際軍事医療統計を作成しようとする動きに参画していた。本陸軍軍医部は、自国の軍事医療統計を各国に発表することで、国際進出を図っていた。②は①の日本陸軍軍医部による軍事医療統計の発表に呼応して活発化していた。③は清国駐屯軍付軍医間の学術的な交流が活発であったことが分かった。清国で得られる学知は①②とは異なり、より実践的なものであった。

以上から明らかになったのは、明治期における日本陸軍軍医部は複数の学術的な回路を構築し、質的に異なる様々な種類の学知を獲得できる環境を整備し、参照できる学知の幅を広げていたことであった。この重層的な回路の存在が日本陸軍の対外派兵の質を安定化していたのである。